

書

評

『崩壊か再生か ロシアとカザフスタン』

鈴木 敏督・塩田 長英 著 新評論

定価2266円 256頁

梶 慶一郎 (第一経理)



混迷するロシアをなめらかな文体で描く

この本は、協同総研の理事である塩田長英氏(明海大学)とその友人との共著です。

旧ソ連の中のロシアとカザフスタンの現状を通じて、旧ソ連はどう変わりつつあり、どこへ行こうとしているのか——を、これらの国と、研究と貿易で長くかかわってきた二人が、これからも、かかわっていく者として、書かずにはられない、という思いで書かれた本です。

二人は小説が好きで、鈴木氏は小説も書いている。従って、内容は、政治・経済・貿易・生活など多面にわたっていますが、文面はなめらかで、面白く読ませてくれます。

書くほどに疑問がわいてくる、旧ソ連

「マルキシズムや社会主義には強い関心を持っていたし、いまでもその考え方にはかなりの共感を持っている。しかしソ連は嫌いだった」という塩田氏。塩田氏は産業組織論を専攻し、各国の家族構造と機能の研究に長けたざざわり、すでに20ヶ国以上の国々を比較研究してきました。そして、6年ほど前からソ連・東欧諸国の調査研究をはじめ、以来、ロシア・カザフスタンとは深いかわりに関心を持っています。

鈴木氏は、1965年から日ソ連貿易にかかわっており、現在は自分で会社を経営し、財産を注ぎこ

んでまでロシア貿易を続けている方です。

「65年から私は日ソ貿易にかかわってきた。旧ソ連の貿易業界のあり様も大きく変わった。それらのドラスチックな変化を見つめ、かつ翻ろうされてきた。そのてんまつの一部でも書きしるしておきたいと考えていた」「旧ソ連はどこへ行こうとしているのか——記録を重ねるうち、疑問は新たな疑問を呼び、わかっていたと思っていたものが、まったくわからなくなる。そんなロシアに対するとらえ難い、そのくせ書き記してみたい、矛盾した気持」で書いた鈴木氏。そんな二人の気持が本の全体を貫いています。

帝政ロシア時代の遺物を持ったままのソ連社会は、「個我」の確立がないまま、一党独裁のもと腐敗、墮落、誤り、無気力を惹起し、人権が抑圧されてきた社会でありました。しかし社会主義思想は、福祉、生活保障などの人道的政策においては、世界各国に大きな影響を与えました。

そんな旧ソ連の人たちの生活はどうか——ホテルのひどさ。食事に群がるはえ。トイレの不潔さ——ロシアに行くといろいろ現実にはあきれてしまう人が多いでしょう。

ルーブル暴落の報道など、ロシアのニュースはあまりいいものではありません。ソルジェニツインは、「現在のロシアは、最もゆがんだ道に陥ってしまった」(10月28日)と言っています。でも一つの希望は、広島でのアジア大会で、カザフスタンが金メダルを2個取ったことでしょうか。

いろいろ旧ソ連に興味を引き込んでくれる本です。一読をお勧めします。